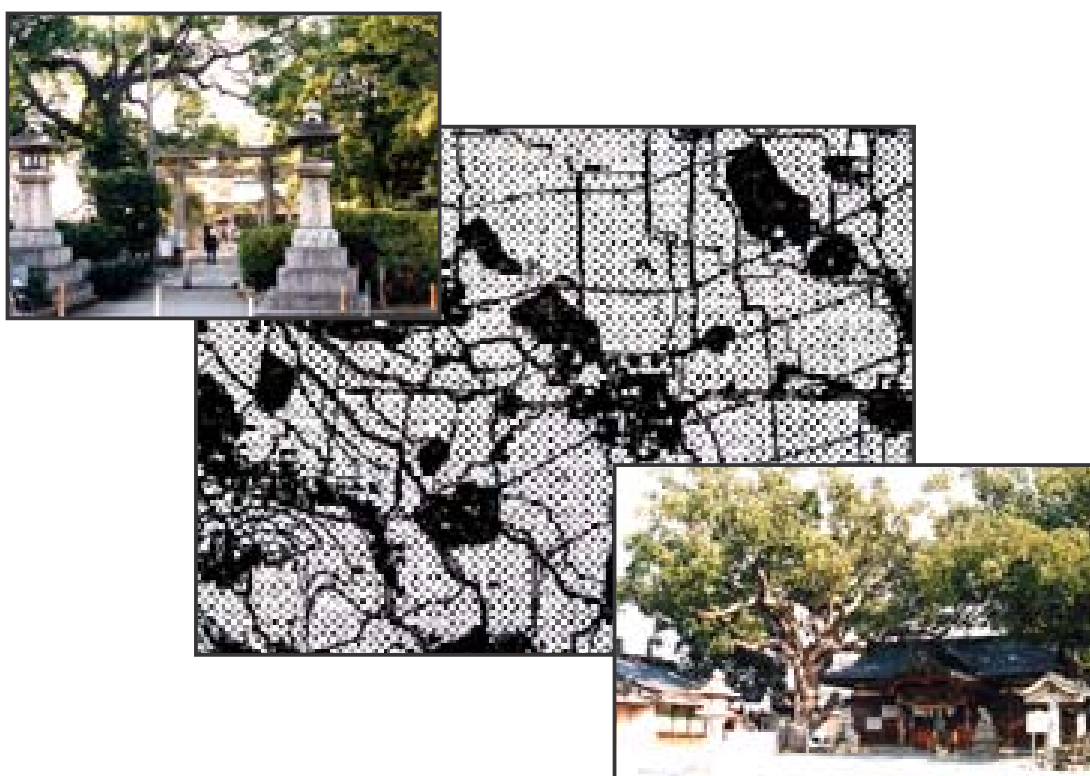


# わがまちの 再発見 金岡 文化財 長曾根

金岡・長曾根地域の寺社と美術工芸品



2002.3 堺市教育委員会

# はじめに

堺市教育委員会では、平成12・13年度の2ヶ年にわたり、金岡・長曽根地域の美術工芸調査を実施し、両地域で13ヶ所、合計115件（絵画54・彫刻42・工芸6・その他13）の文化財を確認することができました。

この調査成果をひろく市民の皆様方に知っていただくために、この度金岡公民館においてセミナーを、また、北支所で調査概要の写真パネル展を実施することになりました。

金岡・長曽根両地域は豊かな歴史と伝統をもち、これまでも地域の方々によって、歴史や生活文化の紹介が数多くおこなわれています。今回の事業が、地域の皆様方のこれまでの取り組みと合わせて、今後のまちづくりや地域の文化財に対する理解につながれば幸いです。

調査及びセミナー、パネル展の実施にあたりましてご協力をいただきました所有者をはじめ、関係者のみなさんにあらためてお礼を申し上げます。

## 講師からひとこと

仏像の魅力は、数百年のながきにわたり多くの人々の願いがこめられた「祈りの造形」であるということと、地域の歴史に密着していることです。

私は、両地域に優れた仏像がたくさん残っていることに本当に驚いています。どうか、そのことを地域の誇りにしてください。

### 長田寛康 おさだ ひろやす 先生

大阪経済大学教授

奈良県生まれ 神戸大学大学院で芸術史を専攻

和歌山県立博物館を経て、1990年より現職

専門分野：日本美術史

主な著作：『和歌山県史』原始・古代編

## セミナー講師紹介



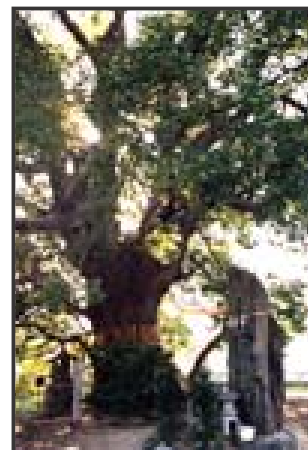
# 金岡地域の文化財

明治 22 年（1889）金田村・長曾根村が合併して金岡村（昭和 13 年に堺市に合併）が成立するまでは、この地域は「金田」とよばれていました。金田は金太ともいい、「貞永元年（1232）得勝寺鐘銘」（『日本古鐘銘集成』所収）に「河内国八上郡金太郷得勝寺」とあるのが資料に見られるはじめです。中世には、日置荘・長曾根荘とならんで鑄物師の居住地であったことが知られています。

堺の豪商で五箇荘の代官をつとめていた今井宗久は、永禄 12 年（1569）に、吹屋（鍛冶屋）の許可をめぐって「金田寺内中」に書状を送っています。「寺内」とは、寺や道場を核として一定の領域を設定した都市的集落のことで、中世末より真宗寺院を中心に形成され、大阪では貝塚や富田林が有名です。金田寺内は、資料が少ないため、詳しい実態はわかりませんが、各寺院の歴史や文化財から見ると、鎌倉末から室町時代にかけて成立した真宗仏光寺派の道場を中心に竹内街道沿いの集落が核となり寺内に発展したのではないかと考えられます。

今回の調査では、光念寺・佛源寺・長光寺（仏光寺派）、光照寺（大谷派）でそれぞれ個性の異なる鎌倉～室町時代の本尊（阿弥陀如来立像）がまつられていることがわかりました。このようなことから、中世の金田が豊かな都市的力を有する集落であったことが推測できます。

その後、江戸時代においても、竹内街道を通じて堺と密接な関係をもちながら、多くの真宗道場が寺院として発展していきます。仏光寺派四箇寺共有として伝わる仏涅槃図（享保 16 年・1731）の裏面には、本図の寄進に関係した多数の金田の人々の名前が記され、信仰を軸にした結束の強さを見てとることができます。この仏画は、現在も四箇寺を毎年順に巡り、涅槃会は地域の行事として親しまれています。



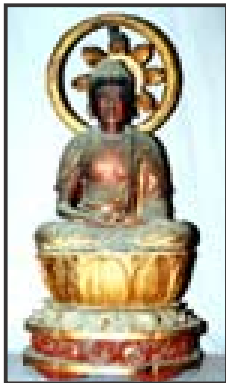
金岡神社御旅所  
（西之宮）



仏涅槃図  
（仏光寺派四箇寺共有 /  
享保 16 年・1731）

# 金林寺

きんりんじ  
寶珠山 融通念仏宗 金岡町805



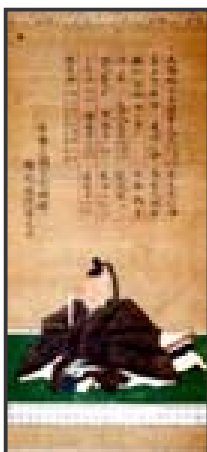
阿弥陀如来坐像  
(本尊・江戸時代)

開かれた年はわかりませんが、正徳元年（1711）「金田村庄屋手鑑」（『堺市史続編』所収）によれば、寛文年間（1661～1673）中興とあり、この頃までに寺院としての体裁が整ったようです。金田では唯一の融通念仏宗の寺院ですが、この頃、近在の北花田村澤池家からは平野大念仏寺第43世の舜空上人（1660～1669大念仏寺住職）が出ており、その影響があったことも考えられます。

本尊阿弥陀如来坐像（像高53.5cm）の像底と蓮華座の底面には18世紀の前半、金林寺の住職であった「祖玄・生信」の名前が記されています。主な文化財に仏涅槃図（江戸時代）、弘法大師坐像（江戸時代）などがあります。

# 金岡神社

かなおかじんじや  
金岡町2866



巨勢金岡図  
(江戸時代)

竹内街道沿いに西面して建つ金田の氏神で、住吉大神・素戔鳴命・大山咋命・巨勢金岡などが祀られ、仁和年間（885～889）の創建と伝えられています。

かつては、「金田三所大明神」とよばれていました。現在、淡路島五色町上堺の河内神社にある梵鐘（兵庫県指定文化財）は、南北朝時代・永和5年（1379）「河州八上郡金田宮三所大明神御宝前」に奉納されたものです。

現在の本殿は、旧本殿が昭和9年の室戸台風で倒壊したため、昭和12年に建築史の大家天沼俊一博士の指導によって再建とりました。

主な文化財に巨勢金岡図（江戸時代）、藤原保昌月下弄笛図（安政3・1856年）、竹虎図（江戸時代）があります。

法性山 真宗仏光寺派 金岡町2321 <sup>ぶつげんじ</sup> 佛源寺

道仙<sup>ほっそうしゅう</sup>という僧が法相宗の寺院として建立し、14世紀の前半頃、仏光寺第7世了源の代に仏光寺派に転じたと伝えられています。その後、寛永21年(1644)寺号が与えられ、貞享5年(1688)に現在の本堂が建立されるなど、今日の寺観が整えられました。



本尊の阿弥陀如来立像(像高49.0cm)は、藤原様式を基調としながら、頭部に鎌倉様を加味した13世紀前半頃の特徴を示す作品です。それまで伝えられていた古仏の両手首、足先などを補修、台座、光背を新調(元禄8年・1695)して真宗の本尊として活用した様子が見え、貴重な作例です。



阿弥陀如来立像  
(本尊・鎌倉時代)

主な文化財には、七高僧<sup>しちこうそう</sup>図、聖徳太子図(宝永7年・1710)などがあります。

永和山 真宗仏光寺派 金岡町2300 <sup>ちょうこうじ</sup> 長光寺

南北朝時代、至徳2年(1385)に草創された寺院を前身とし、文明2年(1470)道故が真宗の道場として開いたと伝えられています。

本尊阿弥陀如来立像(像高52.0cm)は、脛<sup>すね</sup>より下の部分を別材で作り、本体に差し込む特殊な構造の像で、体内に納入されている文書によれば、本像は浄土宗観勝寺の上坊で祀られており、荘厳具が欠損するなど損傷が目立つようになったため、永享7年(1435)4月13日僧善増が修理したと書かれています。



阿弥陀如来立像  
(本尊・南北朝時代)

像の様式的には14世紀の特徴をそなえており、寺の歴史を考えた場合、本像は草創時に造立され、その後、真宗道場に転じた際にも本尊はそのまま継承されたと推測されます。主な文化財には、親鸞聖人<sup>しんらん</sup>図(寛文3年・1663)などがあります。



阿弥陀如来立像体内納入文書(永享7年・1435)

# 光念寺 こうねんじ 緑樹山 真宗仏光寺派 金岡町2357



阿弥陀如来立像  
(本尊・鎌倉時代)

光念寺十五世松野聖意が弘化元年（1844）に記した『実録系譜』によれば、保延4年（1138）源光信が大津よりこの地に移住、その後、正中2年（1325）光信の子孫である松野久左衛門道輔が仏光寺第7世了源上人から光明本尊と親鸞上人木像雛形を拝領し、さらに、道輔の孫である資信が応永14年（1407）光信以来家伝の本尊阿弥陀仏を安置、自ら道恩と名乗り松野道場無量壽光院として開基したとされています。

本尊の阿弥陀如来立像（像高77.5cm）は藤原様式を残した鎌倉時代の作で、本寺の沿革との関連が注目されます。

天保7年（1836）十五世聖意は私塾「善学処」<sup>ぜんがくしょ</sup>を開設し、仏教・漢学・天文学などを教えました。明治5年（1872）郷学校が置かれ、その後、河州第一番小学校（現在の金岡小学校）に引き継がれました。主な文化財には、光明本尊図（鎌倉末～南北朝時代）<sup>ずいよう</sup> 随庸上人図（宝

# 蓮開寺 れんかいじ 寶池山 真宗大谷派 金岡町769



竹内街道に沿って南面して建つ蓮開寺は、「金田村庄屋手鑑」によれば、永正6年（1509）西善の開基によるものと伝えられています。同じ金田村内にある光照寺と密接な関係をもっていたようです。

主な文化財に親鸞聖人図、七高僧図、聖徳太子図、従如上人図（いずれも江戸時代）などがあります。



阿弥陀如来立像  
(本尊・江戸時代か)



糸薄山 真宗大谷派 金岡町2207 <sup>こうしょうじ</sup> 光照寺

光照寺は寺伝によればもと天台宗で、<sup>えしんそうげんしん</sup>恵信僧都源信が開いたとされ、<sup>さんごう</sup>山号である「<sup>いとすすき</sup>糸薄」は、鎌倉初期の歌人<sup>とうれんほうし</sup>登蓮法師が、『徒然草』にも紹介されている「<sup>すすき</sup>ますほの薄」(糸薄)をこの地に植えたことによると伝えられています。

嘉暦年間(1326～1329)の兵火により荒廃しましたが、僧正順が再建、本願寺三世覚如上人が逗留した14世紀中期に真宗に転じたようです。

本尊阿弥陀如来立像(像高78.0cm・寄木造)は、14世紀の秀麗な作風の像で、僧正順の再建時期との関連が注目されます。主な文化財に、親鸞聖人絵伝四幅(貞享3年・1686)、経蔵に安置される傳大士二童子像(文政11年・1828)、弘安5年(1282)銘の石造手水鉢(用途については検討を要す)があります。



阿弥陀如来立像  
(本尊・南北朝～室町時代)



普門山 真言宗 <sup>かんのんじ</sup> 金町1082 観音寺

かつては金岡の東、大道町の竹内街道沿いに位置していました。

播磨地方や堺市南部に多く開基伝承をもつ<sup>ほうどう</sup>法道仙人が開いたと伝えられています。沿革は定かではありませんが、寛文年間(1661～1673)に再建、観音寺と称したとの伝えもあり、不動明王立像(寛文2年・1662)が造立される頃までには、寺院として再興されていたのではないかと考えられます。

毘沙門天立像(像高65.8cm・一木造)は、頭部や両肩より先は後補になっており、表面の摩耗が激しいものの、ゆったりとした量感のある体部の表現などから、平安時代後期の作と考えられます。

主な文化財に聖観音菩薩立像(本尊・江戸時代)、弘法大師坐像(貞享元年・1684・洛陽大宮方大仏師右近康和作)などがあります。



毘沙門天立像  
(平安時代後期)

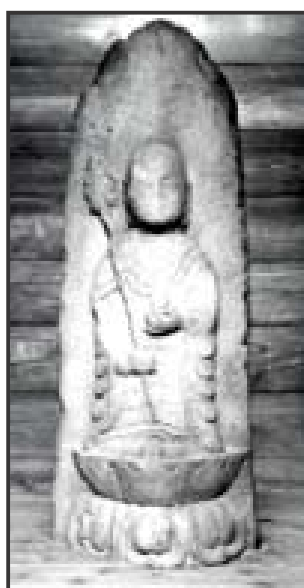


# 長曽根地域の文化財



長曽根遺跡出土軒丸瓦  
(拓本)

12世紀末～13世紀前半  
(『堺市文化財調査概要報告  
第58冊』・1996堺市教  
育委員会)より



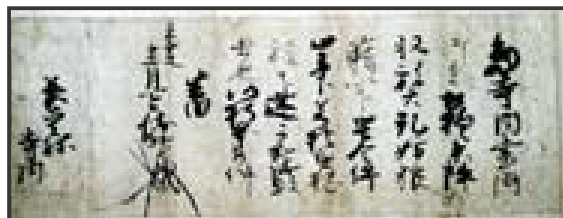
善龍寺 石造地藏菩薩立像  
(建武2年・1335  
/府規則指定)

金田村と同様、河内国八上郡に属する長曽根村は、平安時代末より、京とのつながりが深く、「執政所抄」保安2年(1121)の項によれば、撰関家が元旦に使用する「薦」<sup>こも</sup>三十枚を納めていました。その後、保元3年(1158)に朝廷から石清水八幡宮に発せられた命令の中に、「河内国長曽根荘」が見え、このころまでには、石清水八幡宮極楽寺領の荘園が営まれていたことがわかります。

発掘調査の成果でも、現在の長曽根地域の東方に奈良時代から江戸時代の集落跡である長曽根遺跡があり、一部では、12世紀末から15世紀に至る寺院跡など、長曽根荘および、中世寺院清浄光院(善龍寺)との関連が注目される遺跡が発見されています。

戦国時代、天正元年(1573)には、佐久間信盛、明智光秀らの河内若江城攻めと呼応して、織田信長の重臣柴田勝家が、寺内での「陣取り、放火、<sup>らんぼうろうぜき</sup>乱妨狼藉」を禁じており、この地域が相当大きな力をもっていたことがうかがえます。

江戸時代には秋元氏の領地となり、村内に陣屋が置かれていたと伝えられています。



善龍寺 柴田勝家折紙  
(天正元年・1573)

## 長曽根神社

ながそねじんじゃ  
長曽根町



八幡大神<sup>はちまんおおかみ</sup>と牛頭天王<sup>ごずてんのう</sup>を祀っており、由緒沿革等は詳かではありませんが、長曽根の氏神として長年信仰を集めています。二棟が並置される本殿は、棟札によれば、享保5年(1720)の建立です。

両本殿に一對づつ安置されている木造の狛犬<sup>こまいぬ</sup>(像高31.0cm～32.0cm)は、台座裏の墨書銘から、寛政3年(1791)に制作されたことがわかります。堺では数少ない制作年のわかる木造の狛犬として貴重なものです。主な文化財に随神像<sup>ずいしんぞう</sup>(江戸時代)があります。



## 真宗大谷派 長曾根町648 <sup>さいこうじ</sup>西向寺

寺伝では、天正8年(1580)恵燈の開創と伝えられています。本寺に現存する七高僧、聖徳太子、親鸞聖人図のいずれもが、大谷本願寺第16世の一如上人(元禄13年・1700没)の裏書があり、17世紀末に真宗寺院として整えられたのではないかと考えられます。

境内の鐘楼と安永9年(1780)銘梵鐘は、かつて黒土町福王寺(廃寺)にあったもので「<sup>せんしゅうさかいまくなみいずも</sup>治工泉蒔塚菊波出雲<sup>ようちゆうめい</sup>」の陽鑄銘があります。菊波家は池田家と並び、近世の堺で隆盛を誇った鑄物師で、法道寺多宝塔相輪(承応4年・1655)などの現存作例がありますが、梵鐘で現存するものは少なく、貴重です。



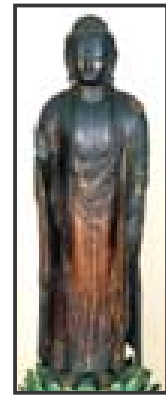
梵鐘(江戸時代 安永9年・1780/菊波出雲作)



## 無量山 真宗大谷派 長曾根町679 <sup>しょううんじ</sup>正雲寺

開基や創立については、詳かではありません。八尾別院の記録によれば、寛文8年(1668)寺号があたえられているようです。

建て替え以前の本堂の棟札が残されており、それによれば、文政12年(1829)年僧慈眼の代に「金田邑大工多平長兵衛為恒」によって本堂が建立されたことがわかります。主な文化財に阿弥陀如来立像(本尊・江戸時代)などがあります。



阿弥陀如来立像  
(本尊・江戸時代)

## ぎょうじゃどう 長曾根町697 行者堂

正雲寺の東、西面して<sup>えんのぎょうじゃ</sup>役行者を祀る堂です。かつては、初芝に祀られていたと伝えられていますが、明治中期の本堂建立時の志納金名簿が残されており、この頃までには、長曾根に移されていたことがわかります。

本尊の役行者倚像・前鬼後鬼像は、江戸後期の作で、保存状態の良い大型の作例として貴重です。主な文化財に弘法大師坐像(江戸時代)、不動明王立像(江戸時代)があります。



役行者倚像・前鬼後鬼像  
(江戸時代)

# 善龍寺 ぜんりゅうじ 真言宗 長曾根町661



准胝観音坐像  
(本尊 享保10年・1725)



如意輪観音坐像  
(鎌倉時代)



弁財天十五童子図  
(室町時代)

善龍寺は、中世の大寺院「清浄光院」を引き継いだと伝えられています。

鎌倉時代の律宗の高僧叡尊えいそんの自叙伝である『感身学正記』によれば、弘安8年(1285)叡尊は河内国長曾根庄清浄光院に下向し、六日間で七百人に菩薩戒ぼさつがいを授け、堂塔供養どうとうくようや大法会だいほうえをおこなっています。

近世の善龍寺は、大鳥神社の神宮寺で、近世の戒律復興運動の中心的寺院であった神鳳寺じんぼうじ(現在は廃寺)の末寺でした。

今回の調査で、本尊の准胝観音坐像じんていかんのんざぞう(像高73.0cm)の頭部内面から刻銘(「享保十巳年三月十日 / 化主海州律師建之 / 津田小山本尊」)が発見されました。海州律師かいしゅうりっしは善龍寺第12世海州恵照にあたります。

よくみられる観音像の中でも准胝観音の作例は珍しく、しかも制作年がわかり、作行や保存状態が優れた江戸時代の仏像彫刻として貴重です。

また、厨子内に安置される如意輪観音坐像にょいりんかんのんざぞう(像高48.6cm)は衣文や体部のモデリングに調和のとれた鎌倉時代後期の宋風彫刻の秀作で、清浄光院時代の隆盛をしのばせる貴重な作品です。

主な文化財に延命地藏菩薩経えんめいじざうぼさつきょうが体内に納入されていた地藏菩薩立像(台座銘 / 元禄17年・1704・京三条河原町西入町定朝より二十六代大仏師の弟子中黒一覚べんざいてんじゅうごどうじず)、弁財天十五童子図べんざいてんじゅうごどうじず(室町時代)、門前には建武2年(1335)の銘がある石造地藏菩薩立像(府規則指定)があります。



# 美術工芸品の文化財調査

「文化財調査って何をやるの？」調査のお願いにまわっていると、よくみなさんから聞かれます。調査といっても、みなさんが普段見ている文化財を少し詳しく「見る」ということ。仏像の調査を例に、少しでも疑問に答えてみましょう。

- ごあいさつ（仏像に対して敬意を払う）
- 仏像を動かす（はずれる部分もあるので慎重に）
- ほこりを払う（やわらかい刷毛や筆で）
- 大きさを測る（メジャーとカリパスで）
- 形を記録する（観察係と記録係と分かれて）
- 銘文や付属物を確認
- 保存状態（作られた当初の部分と後補の部分はどこか）
- 写真撮影（バックに白布を貼り、前後左右斜めから）
- 仏像を戻す

- 調査七つ道具
- ・カメラとストロボ
- ・三脚 ・フィルム
- ・ホッカイロ（冬）
- ・電気コード
- ・バック白布
- ・綿ふとん
- ・懐中電灯
- ・調査票と筆記用具
- ・メジャーとカリパス
- ・鏡
- ・刷毛と筆



動かした仏像のほこりを刷毛で払う  
（長曾根・行者堂）

## 調査によってわかること

### つくられかた 技法



台座・本体とも複数のパーツに分かれる  
（長光寺 阿弥陀如来立像）

普段は厨子の奥深く安置されている仏像。文化財調査では、慎重に動かして、明るいとこでじっくりと観察します。

仏像の技法には大きく分けて一木造（一本の材木でつくる）寄木造（複数の材木を組合せる）一木割刳造（一本の材木でつくり、途中で縦に割り内側を削りぬいてから合わせる）があります。台座もいくつかのパーツにわかれていることが多く、時には部材をはずして内部の構造を調べることもあります。

つくられかた 技法 の特長で、ある程度つくられた時代もわかります。

### つくられた時代・つくった人 銘文・納入品

仏像や絵画などを詳しく調べていると、銘文が見つかることがあります。銘文には作られた年代や作者、作った当時の住職や資金を提供した人の名前などが記されています。

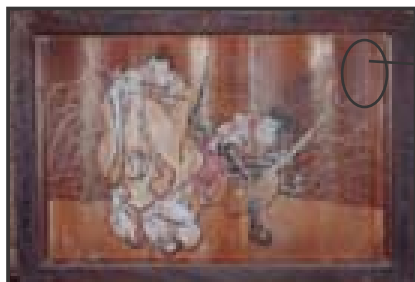
また、仏像の体内にはお経やその他色々な品物が納められていることがあります。

どちらも、作品をつくった背景や事情を考える上で重要な情報となります。

画面右上の署名と印章は肉眼では確認できなかったが、赤外線撮影によってうかがってきた

[ 田村波光 ]

( 金岡神社・藤原保昌月下弄笛図 )



像底にあけられた小さな穴から延命地藏菩薩経が納入されていました 右

台座底面には台座が制作された年と作者名が記されていました 下

[ 元禄 17 年 3 月 24 日 ]

[ 京三条河原町西入町定朝より二十六代大仏師の弟子 中黒一覚 ]

( 善龍寺・地藏菩薩立像 )



画面の裏に制作の事情と、制作に関わった人の名前がびっしり書かれていました 左

画面表の向かって右下には、署名と印章があり、作者名がわかります 右

[ 巨勢金岡 32 代を名乗る巨勢隆栄 ]

( 仏光寺派四箇寺共有・仏涅槃図 )



## 調査地域位置図



パネル展 街道・寺・まち 現在にいきづく中世のみほとけ 金岡・長曾根美術工芸調査写真展  
平成 14 年 3 月 19 日(火)~ 28 日(木)〔21 日(祝)を除く〕  
北支所 (堺市新金岡町 5 丁 1 - 4) 1 階エントランスホール 入場無料

## MEMO



わがまちの文化財再発見セミナー  
金岡・長曾根地域の寺社と文化財  
堺市行政資料番号 1-L3-01-0352

2002年3月16日  
発行 堺市教育委員会社会教育課  
堺市南瓦町3番1号

072(228)7491

ホームページ [http://www.city.sakai.osaka.jp/city/info/\\_syougai/\\_kyouiku/index.html](http://www.city.sakai.osaka.jp/city/info/_syougai/_kyouiku/index.html)